



◎福岡県立大川高校と福岡県立大川工業高校が統合再編し、2002年11月開校。普通科、文理科、住環境システム科の3学科を持つ。市内唯一の高校で、「地域を愛し、地域に愛される学校」を目標に掲げる。キャリア教育や生徒の資格取得にも力を注ぐ。

設立

2002(平成14)年

形態

全日制・定時制/普通科・文理科・住環境システム科/共学

生徒数

1学年約160人

2015年度進路実績(現浪計)

国立大は、山口大、佐賀大に2人が合格。私立大は、福岡大、福岡工業大などに延べ20人が合格。短大、専門学校進学31人。就職は、アサヒコーポレーション、大川信用金庫、関家具、マツダなどに48人。公務員2人。

住所

〒831-0005
福岡県大川市大字向島1382

電話

0944-87-2247

Web Site

<http://shofu.fku.ed.jp/>

福岡県立
大川樟風高校

ICTの利活用による指導

質の高い授業を ICTで実現し、生徒を 主体的な学びへと導く

変革のステップ

背景

◎長年の生徒指導によって、生徒の意識を学びに向かわせる環境が整った。次の一手として、ICTの活用を打ち出す

STEP 1

実践

◎校内に無線LAN環境とタブレット端末を整備。ICTを授業の中で問題演習や資料の提示などに活用し、家庭学習時間の分析などにも利用

STEP 2

成果

◎ICTを効果的に用いることで、授業の質が高まり、模試の分析もより精緻に出来るようになった

STEP 3

生徒の自尊心を高め
学びへと向かわせる

2012年から13年頃のこと。福岡県立大川樟風高校の教師たちは、「そろそろ、本校も新しい取り組みに着手するべき時期が来ている」と感じていた。

同校は、大川高校と大川工業高校の統合再編により開校し、03年4月に1期生が入学した。当時は、生活態度に落ち着きがなく、自尊心が低い生徒たちを、いかに学校生活や学びに向かわせるかが課題だった。開校2年目に赴任した大久保直樹先生は次のように振り返る。

「本校では、毎年、入学生に意識調査を行っています。ですが、自尊心が低い傾向が続いていました。『どうせ自分は何をやっても駄目だ』と思ひ込み、何事にも消極的で、生活も乱れがちでした。その状況を立て直すことが何よりも必要でした」

まず着手したのが、生徒指導の強化だ。「樟あつぷ運動」というカードを作成し、生徒が服装違反や交通ルール違反などをした時に渡す。累積枚数が5枚となった生徒には、保護者とも連携しながら個人指導をした。

次に、生徒の善い行いを認める「UPius^{あつぷらす}」を始めた。これは、生徒が学校行事後に片付けを手伝ったり、友だちを手助けしたりといった優れた行為をした時に、教師がその場で「U

Plus樟」のカードを渡すという取り組みだ。カードをもらった生徒は、褒められた喜びと共に自尊心が高まるようになる。更に、生徒一人ひとりの善い行いを認めることで、「先生は自分のことをちゃんと見てくれている」と、学校や教師への信頼感を高めることも狙いとした。そうした取り組みが効果を見せ始めていたの



福岡県立大川樟風高校校長
山田和弘 やまだ・かずひろ
教職歴35年。同校に赴任して1年目。「課題の中に解決のヒントがある」



福岡県立大川樟風高校教師
富石 亮 とみいし・あきら
教職歴33年。同校に赴任して2年目。「自分の人生に真摯に向き合い、チャレンジ精神を発揮して、夢を実現する生徒を育てたい」



福岡県立大川樟風高校
大久保直樹 おおくぼ・なおき
教職歴19年。同校に赴任して12年目。進路指導主事。「自分の学校に誇りを持ち、夢に向かって挑戦し続ける生徒を育てたい」



福岡県立大川樟風高校
南里加壽子 なんり・かずこ
教職歴23年。同校に赴任して2年目。文理科主任。「変化を恐れず精進し続けたい」



福岡県立大川樟風高校
蒲原航太郎 かもはら・こうたろう
教職歴3年。同校に赴任して4年目。教育の情報化推進部主任。「何事にも積極的にチャレンジし、日々生徒と共に成長したい」

が、13年度頃のことだった。生徒の生活が落ち着き、学びに意識が向かうようになり、次の一手を打つべき時期が来たと教師は実感していた。

ICTに可能性を感じ 積極的に活用する教師が増加

同校が取り組むことにしたのは、電子黒板やタブレット端末といったICTを活用した教育活動だ。同窓会と振興会から資金協力を得て、13年11月に最新の電子黒板とタブレット端末32台（生徒用22台、教師用10台）を購入。更に、福岡県の県立高校としては初めて無線LAN環境を校内に整備した。

無線LANの導入については、当初、県の担当部署からセキュリティ上のハードルの高さを相談されていた。しかし、「本校が県のICT教育のパイオニアになります。教師が得たノウハウを県内の他校に広めていきます」と半年間を掛けて粘り強く交渉し、実現を果たした。

なぜICTを導入したのか。当時教頭を務めていた山田和弘校長は次のように話す。

「本校では、『生徒がもつと分かる授業をしよう』を目標としています。ICTはあくまでも授業を行う際の道具です。道具があることで、教師は『この道具をどう使えば、生徒の興味・関心を引き出すことが出来るのか』と、いろいろな工夫の余地が生まれます。学

校を挙げてのICTの導入を、授業の質を高めるきっかけにしたかったのです」

ICTの活用に関しては、比較的得意な教師と、苦手意識を抱く教師に分かれやすい。また、ICT教材に慣れていない教師は、それを授業にどのように取り入れればよいのか、具体的なイメージを持ちづらい。そこで同校では、まず、ICT活用が得意な教師が、先進校の視察などから学んだ成果を他の教師の前で実践することで、ICTを活用した授業展開例や個々のノウハウを広めていくことにした。

また、定期的な研修とは別に、不定期のミニ研修を実施した。それを中心となって進めているのが、教育の情報化推進部主任の蒲原航太郎先生だ。

「正規の研修を増やしすぎると、先生方の負担が大きくなります。そこで、昼休みなどに職員室で『今からタブレット端末の動画の使い方について説明します』などと先生方に声を掛け、ミニ研修会を開いています。短時間で終わる内容にして、気軽に参加できるように工夫しています」

蒲原先生は、ICTを校内に浸透させていくためには、「気軽さを感じてもらうこと」が重要なポイントだと強調する。例えば、授業中に5分間の動画を見せるだけで生徒の関心が高まる様子を、教師に見せる。しかも、授業に取り入れるための操作が難しくないと分かれば、教

師たちは「自分の授業でもちよつとやってみよう」という気持ちになる。そのような活動を繰り返し行うことで、今では、多くの教師がICTを授業で活用している。

演習問題の正答率を見ながら 次の授業展開を考える

富石亮^{とみいし}教頭も、ICTの校内への浸透ぶりを実感している。

「10台ある教師用のタブレット端末は、フル稼働の状態です。個人で購入し、授業に活用する先生も目立ちます。また、職員室の雑談でも、タブレット端末の活用に関する話題がよく挙がっています」

ICT環境を整備してわずか1、2年で全校に浸透したのは、教師自身が授業や生徒の学習への効果を感じ取っているからだ。

例えば、国語の古文の授業では、文法事項の復習時に、教師が「Classi」(*1)のウェブテスト機能を使い、関連問題を生徒のタブレット端末に配信。すると、教師の手元にあるタブレット端末には、生徒からの解答が送られてくる。その解答内容や正答率を見ながら、教師は「この文法事項については、生徒はあまり理解できていないようだから、重点的に解説しよう」というように、指導を考えていく。その場で生徒の理解度を把握し、それに応じた授業展開を、

ICTが可能にしているのだ。そして、生徒の理解度に対応した授業だからこそ、生徒の反応も違ってくる。

「担当する日本史の授業では、特に資料を見せる時にICTならではの良さを実感しています。デジタル画像では、角度を変えて見せたり、俯瞰したり、他と比較したりといったことがスムーズにでき、生徒のより深い理解につながっていきます。学力の定着にすぐに結び付くものではありませんが、少なくとも生徒たちにとって、日本史の学習が取り組みやすいものになっているのは確かです」(大久保先生)

家庭学習時間をデータで共有し 模試分析に活用

15年度は、再び同窓会と振興会からの資金協力を得て、タブレット端末48台を新たに購入した。この48台は現在、文理科の2年生と3年生に1人1台ずつ貸与され、必要に応じて普通科や住環境システム科の生徒が利用できるようにしている。

「将来的には、全ての生徒に1人1台のタブレット端末を歩き渡らせたいと考えており、また、貸与ではなく、生徒に購入してもらうことも検討しています。今はまだ取り組みが始まったばかりですので、進学希望の生

図 家庭学習時間を記録する画面



教科別に学習時間を入力すると、自動的にグラフが作成され、一目で学習時間の比率が分かる。
*学校資料を基に編集部で作成した画面見本

徒が学ぶ文理科で、学習指導や進路指導にタブレット端末を生かしていくノウハウを蓄積し、他学科にも展開していきたいと考えています」(山田校長)

文理科では、「Classi」のデジタル学習記録の機能を用いて、家庭学習時間を記録し、そのデータを指導に生かしている(図)。まず、生徒は毎日、教科や分野ごとの家庭学習時間を、デジタル学習記録に入力し、教師に送る。教師はその内容をチェックし、コメントを付けて返信する。文理科3年生の担任である南里加壽子^{なんりかすこ}先生は次のように話す。

「以前は紙媒体に手書きで家庭学習時間を記録させていましたが、書くのに時間が掛か

*1 ソフトバンクとベネッセコーポレーションの合併会社である Classi 株式会社 が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

ることもあり、生徒は提出しないこともあり
ました。ところが、タブレット端末やスマート
フォンを使ったデジタル学習記録では、生徒
は簡単に入力できるようです。教科ごとの学
習状況が色分けされたグラフで確認できるの
で、アドバイスも具体的にしやすくなりました
。この記録は生徒自身も見られるので、中に
は、過去の学習時間や内容を自分で振り返り
ながら、各教科への時間配分を見直しなが
ら今後の学習計画を立てている生徒もいま
す」
生徒の家庭学習時間のデータは、教師間で共
有している。学習時間が特定の教科に偏って
いる生徒に個別指導をしたり、模試の分析会
で成績との関連を見たりすることにも活用す
る。例えば、数学の家庭学習時間が多いの
に、模試の成績に結び付いていない場合、学
習方法の問題があると考えられる。そのよ
うに、成績の伸長や伸び悩みの原因を分析
する際に、家庭学習時間記録を有効なデー
タとして活用しているのだ。

「家庭学習時間を紙媒体に記録していた時
は、集計作業に手間が掛かることもあり、教
師が活用する上でも難しさを感じていま
した。先生方からも、実施の必要性に疑問
の声が上がっていたほどです。データの収集
や分析といったICTの強みを生かせる領域
ですので、今後も効果的な活用方法を考
えていきたいと思えます」(蒲原先生)

遠隔授業や海外との交流で 視野を広げる

環境整備から短期間で全校にICTの活用を
浸透させ、生徒がより分かりやすく、より質
の高い授業を行っている同校。今後は、キャ
リア教育や国際理解授業、学校行事や部活
動にもICTを積極的に活用していく方針だ。
その一環として、7月には、ICTを用いて、
同校と長崎外国語大を結び、遠隔授業を
実施した。文理科の1年生の生徒たちが、
電子黒板を通して、イギリスのウェール
ズ出身の大学教員からウェールズの文化
や教育制度などを学ぶという内容だった。

情熱 若手教師が語る、指導変革への

生徒や先生がもっと気軽に ICTを使える環境を整えたい

教育の情報化推進部主任 蒲原航太郎

教育におけるICTの活用については、大学の授業で学んだ頃から可能性を感じていました。担当教科の数学の授業では、問題演習でタブレット端末を活用し、生徒の解答の様子を把握しています。生徒が入力した解答の中から1つ選んで電子黒板に映し出し、その生徒に解答の過程を説明してもらうこともあります。講義形式では生徒は受け身の姿勢になりがちですが、タブレット端末を活用することで生徒をうまく巻き込んでいると思います。

中には学習意欲が低い生徒もいますが、ICTを使って授業をすると顔が上がり、そして教師が求める以上のことを自主的に調べていることもあります。先日、2次関数のグラフについて教えていた時に、3次関数や4次関数のグラフを作る生徒が現れました。ICTは、学習意欲が低い生徒を学びに向かわせるきっかけにもなると実感しています。

ただ、ICTは、時々フリーズするなどのトラブルが起こることがあります。そこで、機器の操作が得意な生徒数人を「トラブル解決担当者」に任命しました。授業中に機器が止まった時には教師の手助けをし、他の生徒のタブレット端末の調子が悪い時には正常に動くようにサポートしてくれます。ICT活用は、教師1人だけで頑張るものではなく、生徒と協力し合うことが大切だと思います。教育の情報化推進部主任として、教師も生徒ももっと気軽にICTを使いこなせる環境を整えていきたいと思っています。

「生徒たちは目を輝かせながら、外国人の先生の話を聞き、日本語を交えながらも、英語で積極的に質問をしていました。データ通信料などの課題はありますが、ICTを用いれば、学校の中にいながら国内外の人とコミュニケーションを取ることができ、生徒たちの視野を広げることも可能になります。今後は、海外の生徒たちと共に学べるような遠隔授業が出来ないかと考えており、現在交渉中です」(富石先生)

山田校長は、「ICTはあくまでも道具に過ぎない」という。しかし、その活用方法によっては、学校を大きく変える可能性があることを、同校の取り組みは示している。